

2009年度 第15回FDフォーラム

「学生の学びを支える—つなぐFDの展開—」

日 時： 2010年3月6日（土）13：00～3月7日（日）15：30
会 場： 同志社大学 今出川校地 1日目：室町キャンパス 2日目：新町キャンパス
主 催： 財団法人大学コンソーシアム京都
報 告 者： 栗山 直樹（経営学部）池田 秀彦（法学部）岡部 史信（法学部）
大梶 俊夫（文学部）川井 秀樹（工学部）

学生の主体性を引き出す双方向型授業の重要性

経営学部 栗山 直樹

今回のFDフォーラムの全体を通じて流れるテーマは、「学生の学びを支えるための、つなぐFDの展開」というものであった。学生のための大学、学生中心の大学を目指す本学のあり方や方向性について、非常に大きな刺激となり、参考になる内容であった。初日のシンポジウム、2日目の分科会「双方向型授業への誘い」とともに有意義な情報と議論討論を共有できた。

シンポジウム「学生の学びを支える—つなぐFDの展開—」

初日のシンポジウムでは4人のパネルからそれぞれの「つなぐ」という観点からの問題提示があった。学生をつなぐという側面から岡山大学の橋本勝教授より、大変示唆に富む試みが紹介された。最も驚いたのは、学生がプランを練り、教員を募集・決定する正式な授業である学生発案授業の紹介だった。講師は教員だけでなく、担当可能なら職員が担当し、教える資格は問題にしないということであった。この試みの意義は、学生を知的共同体の主体として位置づけ（委員長は学生）、学生を「顧客」ではなく、「パートナー」として捉え、学生と大学教育を変え、学生と一緒に教育を創るという点にある。パートナーとしての学生が望むなら、大学全体でそれに応えるということであろう。また、120人から150人規模の授業で、チーム制で本格討論を展開する「橋本メソッド」は、競争原理やゲーム感覚を導入して、「楽しい授業」を作り上げ、相互集団教育力を活用し向上させる試みである。これも授業を魅力的なものにする相当に意欲的な取組であると感じた。

職員の立場から、名城大学の神保啓子さんから報告があった。ここでは授業見学会やそのあとの懇談会で、Food and Drink や音楽で楽しく語れる雰囲気而努力され、大きな効果を得たことや、FDにはStaff Development (SD)が欠かせないこと、国際的な訓練やセミナーへ職員を派遣し意欲と能力を引き上げることの重要性が強調された。

教員をつなぐ観点から、同志社大学でFD責任者を務めている圓月勝弘教授は、教員FDの難しさとその対応について意見を述べられた。経験的に、FDなどに賛成するのは全体の2割で大半の6割は受動的であり、あとの2割は絶対反対の立場をとることが紹介され、その事実を認識し受け入れながら対応することが重要であるとの取り組みの心構えを紹介された。その認識の上に同志社大学の全学的な共通認識の広がりへの試みが紹介され、FDワークショップに専任教員数700名のうち、100名が参加するまでになったという。また、新任教員の研修は特に重要で、建学の精神に基づいて、教員文化の刷新と大学の社会的使命の明確化を図ることが重要であるとした。

地域内連携を通じて、大学をつなぐことに尽力されてきた山形大学の小田隆治教授は、山形県

の大学 FD ネットワーク「樹氷」と東日本に地域を広げた「FD ネットワークつばさ」の活動と理念につき報告をされた。FD は一大学で対処できるものではなく相互研鑽を趣旨とする山形大学の取組は、公開性と共有化に特徴を持ち、大学、学生、職員の意識改革を促進し、具体的な取組を次々と生んでいる。授業評価アンケートの共有化、ビデオの FD 教材の共有化など、他大学に大きな影響を与えているものを成果として積み上げてきている。

ディスカッションを通じて明らかになったことは、つなぐ軸は学生であるという点である。何が変わったかではなく、何を变えようとするのが重要であるという論点は、全て学生のための大学であるという本学のモットーとつながる「改革の意志」に通じる。学生が変わったのなら、大学側も変わらなければならないという主張を強く感じた。そういう視点からは能動的に「学生の世論」を捉え、それに敏感に対応していかなければならないことが話題になった。また、このためには、単に FD を制度化すれば良いというものではなく、実情に応じて、各大学が自由な意志で行うことが重要で、義務を感じたところから創造性や嬉々とした意欲は沸いてこないというメッセージは、心していかなければならないと自戒した。

2日目 第9分科会「双方向型授業への誘い」

2日目は、ミニシンポジウムや分科会に別れ、各分科会では50名定員で行われた。第9分科会は「双方向授業」に焦点があてられたもので、本学からは法学部の岡部教授も参加した。午後にはさらに10人程度のグループを作りグループワークを行ったが、これには別のグループに別れて参加した。

この分科会のコーディネーターは立命館大学共通教育推進機構の木野茂教授である。本教授は、双方向型授業研究の専門家であり、立命館大学において双方向授業の実践を全学的に展開している中心者である。木野教授は、双方向型授業とは、形式だけでなく、「学生の主体的・能動的な学習を引き出すような授業の総称」として意義づけている。木野教授の問題意識は、米国がたどったように、大学のユニバーサル化以降の大学教育では、知識伝授の古いパラダイムから、学生と教員が共に授業を構築するという新しいパラダイムの転換が不可欠だとの認識に立つ。このような問題意識が、この分科会で行われた具体的な授業の運営方法と実践の紹介とグループに別れての議論で求められるモチーフとなっていったと思われる。

追手門学院大学の梅村修氏の報告では、双方向型授業の基本は、学生に分かりやすい授業であるという認識に立って、学生の存在を認識し、学生が理解しているのかどうかを常に意識してゆくことが重要であるとする。そして学内の人気授業の分析結果から、学生を意識したメタ言語的表現の分析で特徴的なものがあることを指摘された。これらの講義には、学生の自発的な理解を助ける表現の使い方に秀でたものがあるという。次に留学生を対象にしたインタビュープロジェクトなどの実践例を紹介されたが、最も共感できたのは、高校から大学への意識の転換を促すため、勉強と研究の違いについての梅村氏が常に強調している学生への次のような説明であった。「『勉強』は先生が学生に発問しそれに学生が答えるもの。研究は学生が自身に向けて問いを発し、自らそれに答える営為である。そして、勉強は自身のためにすること、研究はみんなのためにすること」。

その他、法政大学の大崎雄二氏、山形大学の杉原真晃氏が双方向型授業の展開についての実践例の紹介があった。コミュニケーションペーパーの利用、教えあう関係の構築、ICTを使った授業内外のコミュニケーション等、示唆的な実践例であった。

参加を終えて

今回の FD フォーラムを通じて、学生中心の、学生のための大学作りが命題であり、多様で革新的な実践がされていることを実感した。これらは本学が開学以来その旨としてきたところであるが、いよいよ時代の潮流になってきた感と同時に、他大学の意欲的な取り組みに大いに啓発を

うけ、焦燥感まで感じる事となった。教員と職員、大学当局を含むすべての大学構成者、そしてそのよって立つ地域コミュニティーが、有機的に学生の学びを支えるネットワークを形成できるかどうか問われている。そして、学生の学びを支えるアプローチの重点は、木野教授が定義するように「引き出す」ことにあり、押し出すアプローチを貫かないことである。引き出すために押し出すアプローチをとるべきである。そして、課題探求能力（主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野からの柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力：1998年大学審議会答申）を涵養し、問題解決能力につなげ、そして本学が目指すべき価値創造力の養成につなげてゆくべきである。

本学の学生参加の授業作りに導入できると感じたことは、授業作りの公開性とオープンな参加である。学生参加を一部の学生のみならず、全学的にオープンにし、学部の垣根を越えて運営できるイニシアティブがあってよいと思った。また、学生ポートフォリオやポータルサイトの活用を義務ではなく、学生と教員の主体的能動的な関わりを引き出すような内容にしてゆく（あるいはそのような趣旨を前面に出して促進する）ことが望ましいと感じた。

FDを推進、支援するトップマネジメントの役割

法学部 池田秀彦

1. 3月6日13時15分～17時30分 シンポジウム『学生の学びを支えるつなぐFDの展開』

シンポジスト：橋本勝(岡山大学教育開発センター教授)「学生をつなぐFD」、神保啓子(名城大学大学教育開発センター主査)「職員をつなぐFD」、圓月勝博(同志社大学教育支援機構長・文学部教授)「教員をつなぐFD」、小田隆治(山形大学高等教育研究企画センター)「大学をつなぐFD」

コーディネーター：大塚雄作(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

このシンポジウムは、FD義務化の下、FD研修の機会が普及してきたが、FDのあり方については様々な課題が残されているという問題意識から出発して、FDを通して学生の学びの活性化をもたらすことこそ必要であり、そのためには、関係者の双方向的なやりとりが重要であるとして、この双方向性を、「つなぐ」というキーワードに焦点を当てて学生・職員・教員・大学といった相から議論する。

シンポジストの話の中で特に興味深かったのは、最初の橋本教授のものであったので、ここで簡潔に紹介する。教授は、学生参加型・学生主体型授業の効用を説き、一つの例として橋本メソッドを紹介する。これは、チーム制による本格討論型授業で適正規模120～150人、1チーム3～4人、1回2チームが発表、プレゼン1チーム5～10分、その後の質疑応答50分という形式である。

これにより、社会人基礎力としてのコミュニケーション能力の育成をはかり、社会人が持つべき主張力・批判力・判断力・行動力などを涵養し、主体的な学びを通して内容理解を深め、学習意欲の自然な向上をはかることができるという。

この授業方法は、成果を上げていると自画自賛していたが、陰には橋本教授の大変な苦勞があった。毎回の授業でシャトルカード(いわゆるミニツツペーパー)を使い、受講生と教員との一対一の関係を確保し、学生が何を書いても一人一人に合った丁寧な回答コメントをしている。全授業分で毎週20～40時間を使い、質問に対する回答/参考文献の紹介/就活や恋の悩みなどの人生相談/時事問題に対する議論/スポーツ談義/芸能談義等々をコメントしている。

2. 3月7日10時～15時30 第3ミニシンポジウム「FDを推進、支援するトップマネジメントの役割」

報告者：清水稔(佛教大学副学長)、久保哲男(京都外国語大学副学長)、河野勝彦(京都産業大学副学長) 指定討論者：池田輝政(名城大学副学長・理事) コーディネーター：深野政之(京都FD開発推進センター専門研究員)

報告者から各大学のFDの歴史と現状についての説明があった。指定討論者の池田副学長の話しは、FDを考えるうえで大変有益であった。骨子は、次のとおりである。

1. FDとトップマネジメント

- ①教員は、トップマネジメントが嫌い
- ②マネジメントは、法人と教学の二重構造
- ③組織的FDと自律的FDを区別

2. トップが避けて通れないキーワード

FDではなく、FDM(Management) これは、このままでは反発を受けるコンセプト

3. FDMの基本原則

- ①教員個人がキャリアステージをプランニングし、実現に責任をもつ。
- ②組織は、教員の自己信頼を高め継続的な学びを通して雇用勝ちを維持する責任をもつ

4. FDMの方法；支援の方法論

- ①組織の目標を明示し、伝え、共有する。
- ②職能成長を刺激する機会を与える。
- ③資金的な援助を提供する。
- ④OFF-THE-JOB-TRAINING で学ぶ時間を柔軟に提供する。

5. FDM のカバーする範囲

- ①大学の特色作り戦略
- ②選抜、採用、配置
- ③支援プログラム
- ④インセンティブと評価
- ⑤モチベーションの維持

6. 論点の提示;トップ層は?

- ①自分たちの大学の特色を教員に語れるか
- ②教員のキャリア成長に関心があるか
- ③教員の自主性を促す支援を措置できるか
- ④学生の成長を楽しむ文化をつくれるか

双方向型授業への誘い

法学部 岡部史信

【初日（6日）の概要】

- (1) フォーラムの進め方：参加者全員に向けてのシンポジウム。
- (2) シンポジストとテーマ：シンポジストは4名で、それぞれのテーマは以下の通りであった。
 - 1) 橋本勝（岡山大学）：「学生をつなぐFD」
 - 2) 神保啓子（名城大学）：「職員をつなぐFD」
 - 3) 圓月勝博（同志社大学）：「教員をつなぐFD」
 - 4) 小田隆治（山形大学）：「大学をつなぐFD」
- (3) シンポジウムの趣旨：「大学がいかにか『よい』教育環境を整備し、教員がいかにか『よい』授業を準備したとしても、それだけで学生の学びが活性化するとは限らない。教育や学びは、そこに参加する者の双方向的なやり取りのなかで創り上げられていくものである」という基本的な視点に立ち、「学生・職員・教員・大学」をいかにか「つなぐ」かを焦点とする。
- (4) 橋本勝氏の報告の概要と結論：

橋本氏は、「学生をつなぐ」試みとして岡山大学の実践例を紹介した。岡山大学では、「組織でつなぐ」、「授業でつなぐ」、「心でつなぐ」の3つの試みを行っているという。「組織でつなぐ」については、10年前から「学生・教職員教育改善委員会」という組織を立ち上げ、授業改善・システム改善・学生交流を支柱にさまざまな大学改革の試みに学生の主体的な意見を反映させようとしているということである。ユニークな点は、この委員会の学生委員を大学1、2年生を中心に集め、かつ委員長を学生にしているという点である。「授業でつなぐ」については、橋本氏自身が考案した「チーム制による本格討論型授業」という授業の実践例が紹介された。具体的には、1チーム3～4名となり、報告と質疑を行うというものである。ユニークな点は、プレゼンの時間を5分～10分と短くし、むしろ質疑の時間を50分程度確保して、学生のコミュニケーション能力・主張力・批判力・判断力・行動力を高めようとしていることであった。「心でつなぐ」とは、ほぼ橋本氏の結論に相当する内容であるが、上記の効果として、学生が「学生集団の一員としての意識」、「大学スタッフとしての意識」、「学びの主権者としての意識」を高めること、教職員には「学生は社会に送り出す商品ではなく主体的・自立的存在という意識」、「同じ大学を構成するパートナーとしての学生という意識」、「大学の良さを伝承する継承者としての学生という意識」を芽生えさせることが重要であるとの主張であった。
- (5) 神保啓子氏の報告の概要と結論：

神保氏は、職員とともに実践するFD活動の重要性を主張した。そして、名城大学の実践例として、例えば、①「T&L (Teaching & Learning) CAFÉ」というサロンを開催し、教員・学生・職員がピンチョやドリンクを片手に授業のあり方などを話し合う機会を設けたり、②教員と職員がともに積み重ねた実践を共有するために「名城大学教育年報」を発刊したり、③「名城大学大学院 大学・学校づくり研究科」に職員を派遣したりしているということである。神保氏の結論として、「大学のすべての者が教育について考えること、職員は教員のチームメンバーであることが重要である」と結論付けた。
- (6) 圓月勝博氏の報告の概要と結論：

圓月氏は、「教員間をいかにつなぐか」は難問であるが、これがきわめて重要であると主張した。圓月氏の話の組み立ては、①FDの意識の変化の速度に、学生意識・教育環境・教育方法・職員意識・教員意識それぞれに違いがあり、特に教員意識が最も遅れている、②大学教員の意識が遅れている要因は何か、③大学教員文化の伝統と現状、④大学教員文

化の理想像の4つであった。圓月氏の結論は、上記③④に収斂されていた。すなわち、現状では大学教員は、主として「研究」が圧倒的に中心であり、それに圧倒的に離れた2番目の意識として「社会貢献」があり、その他のものとして「教育」や「管理運営」がある。そして圓月氏は、パネルの図の中でこれらを横転または逆さまの文字で表し、要するに「研究のできない者が教育や学内行政に精を出す」という意識があるとし、また現実にそうした状況があることも指摘した。その上で、この大学教員の伝統的意識を、「4つのことが平均的に行える」ことが大学教員のあるべき姿とする意識に変革していくことが理想であると主張した。

(7) 小田隆治氏の報告の概要と結論：

小田氏は、今後の大学のあり方として、ひとつの大学のなかで完結させようとするのではなく、多くの大学が連携して授業内容や大学運営のあり方を改善するための情報共有をすることの重要性を主張した。そして、山形大学が主体となつてすでに取り組んでいる実践例として、「FDネットワーク“つばさ”」事業を紹介した。この事業では、大学間での①公開授業と検討会、②FDワークショップ、③FD合宿セミナー、④学生FD会議、⑤合同FD会議、⑥大学間連携SD研修会（職員研修）を精力的に行っているという。そして、その成果報告集として、すでに「ビデオ版あつとおどろく大学授業NG集」（平成21年6月）、「ビデオ版あつとおどろく大学事務NG集」（平成21年12月）を作成し、今度「ビデオ版学生主体型授業のヒント（仮タイトル）」を平成22年3月中に作成する予定であるという。この事業には、当初は山形県内の大学間で開始されたものであったが、すでに北海道から関東地域まで多くの大学が参加するネットワークになっているということである。

(8) シンポジウムを聞いた感想：上記4つの話の内容は、各大学ともすでに大なり小なり実践している／少なくとも意識していることであろう。その意味では、今回報告された手探りの努力は大いに参考になることが多く傾聴すべき点が多かった。しかし、他方で、このシンポジウムという「つなぐ」とは何か、どう「つなぐ」のか、その意味が必ずしもはっきりしなかった点もあったように思われる。すなわち、教員・職員・学生・大学は必ずしも「横」の関係だけで成り立っているわけではなく、当然「縦」や「斜め」の関係もあり得るのであり、そうした空間的に整理された「つなぐ」を十分に考慮したものであったかどうかよく理解できなかった。この点について質問したかったが、私の順番よりも早く立命館大学からのある参加者が同じ質問をしていた。

【二日目（7日）の概要】

(1) シンポジウムの形式と参加した分科会：二日目は、3つのミニシンポジウムと9つの分科会が開催され、参加者はあらかじめ参加希望を提出していたグループに参加した。私は、第9分科会「双方向型授業への誘い」に参加した。

(2) コーディネーターと報告者：コーディネーターは木野茂氏（立命館大学）であり、報告者は以下の3名であった。

- 1) 梅村修（追手門学院大学）：「講義談話のメタ言語的表現の機能分類」
- 2) 大崎雄二（法政大学）：「中規模授業における学生参加型方式導入の試み」
- 3) 杉原審晃（山形大学）：「双方向型授業の挑戦—学生の意欲・能動性の向上と学習の質保証との連関—」

(3) 分科会の進め方：最初（午前）に、上記3名の報告者がそれぞれの双方向型授業の実践例を紹介した。その後（午後）、コーディネーターと報告者の4名の下に、同分科会参加者（約50名）が10名程度ずつ張り付いて双方向授業の実践についてのワーキンググループを行い、その成果を最後に全体で報告し合った。

(4) 午前の報告の内容：

分科会では、コーディネーターの下で各報告者の報告内容のすりあわせが行われていた

ようで、それぞれの報告の視点はやや異なるものの、全体としての結論はほぼ同じであった。それは、杉原氏の結論にある「教育の質保証：学習者の理解度や思考を無視した『伝達したつもり』からの脱却」、「大衆化への対応：教員からの一方的な講義の限界」、「教育・学習の本質：学び合う喜び、他者との対話、知の共有と継承」を実現するものであるという主張であった。

- (5) 午後の報告の内容：私は、梅村氏のグループに参加した。このグループでは、各自が現在実践している「双方向授業」について紹介し、その後質疑応答が行われた。もっとも、各発表者とも、「授業中の小テストとそれに後日コメントをつけて返却」、「宿題を授業中に学生同士で交換させ採点させる」、「レポートを毎回書かせて良い例と悪い例を紹介して手直しさせる」という内容でほぼ同じであった。そこで、私としては現在共通科目「憲法」で行っているやり方、すなわち、授業の一回目に学生から憲法に関連すると思える社会問題や疑問を匿名の用紙に書かせて回収し、それを学生からの質問リストとして整理して、憲法の授業ではその質問を可能な限り具体例としながら解説し、また試験問題もそうした質問をアレンジした形にして学生の理解度を測っている旨を発表した。この発表は、グループ内では新鮮に映ったようで、梅村氏だけでなくグループ参加者から多くの質問や賞賛をいただいた。
- (6) 分科会に参加した感想：午後のグループ内の発表や質疑は活発に行われたが、分科会全体としてはやや盛り上がり欠けるものであった。この原因は、私も同じであるが、いまだ「双方向型授業」自体のメリットもデメリットも十分に整理・理解しているわけではなく、その手法も完全に手探り状態である参加者がほぼ全員であったからであろうと思う。双方向型授業は確かに少ないテーマについて学生たちに深く考えさせたりする機会にはなるであろう。しかし、例えば、①その後学生が各自で主体的に他のテーマにも取り組んでいけることまで保障できるやり方なのか、②資格試験などを目指す学生たちにそうしたやり方がかえって弊害にならないのか（授業進度や質）、③グループ学習に性格的に向かない学生たちのケアをどうするのか（双方向やグループワークを安易にメインストリームにすることは学生の差別にもつながるであろう）、④教員の物理的負担をどう考えるのか（例えば、初日で圓月氏が主張していた点と考え合わせれば、双方向に莫大な時間をかける分、その他の業務もバランスよく同じだけ行うということが本当に可能なのか）などなど、今後細かく検討しなければならない点が多いと感じた。グループ内での質疑の様子から判断しても、おそらくこうした点は参加者の多くが感じていたと思われる。

学生の支えとなるキャリア教育の構築を目指して

文学部 大梶俊夫

大学コンソーシアム京都主催の第15回FDフォーラムに参加させていただいた。1日目のシンポジウムは「つなぐ」をキーワードに、橋本勝（岡山大学）、神保啓子（名城大学）、圓月勝博（同志社大学）、小田隆治（山形大学）の各シンポジストから「学生の学びを支える」ために、学生、職員、教員、大学がどのように連携しあえるのかについて報告があった。

橋本氏からは、岡山大学の「学生・教職員教育改善委員会」の取組みや、多人数での討論型授業の実践について報告があった。学生を大学という知的共同体における主体的存在として捉える視点が印象的であった。神保氏からは職員の立場から、「大学・学校づくり研究科」をもつ名城大学のFDの取組みが紹介された。圓月氏からはFDにおいて教員の意識改革がなぜなかなか進まないのかについての分析と、教員をつなぐための「心得」が紹介された。結論は「フェスティナ・レンテ（ゆっくり急げ）」であった。小田氏からは山形大学が中心になって行っているFDの大学間連携「つばさ」が紹介され、大学が協同することの必要性が訴えられた。

全体として、内容的にはすでに刊行されていることも多く、知識的に目新しいことはそれほどなかったが、考えさせられることは多かった。ひとつはもはやFDは教員だけの問題・課題ではない段階に進んでいるということである。岡山大学の「学生・教職員教育改善委員会」のような活動は他の大学にも見られるようで、授業が教員の一方的な講義型から学ぶ主体である学生を巻き込んだ双方向型に転換しつつあるのと同様に、FDにおいても個々の教員の授業改善の段階から、学生を一方の担い手とする改革の制度・仕組みづくりが求められる段階に来ているように思われた。ちなみに岡山大学はこのFDフォーラムにも学生が参加しているとのことであった。もうひとつは質疑応答のなかで各シンポジストが強調していた、FDにおける実験してみる大切さである。横並び意識で行うのではなく、大学らしく、新しいこと、失敗するかもしれないことに踏み出す勇気を教員や個々の組織に与えることがこれからのFDの深化には必要だと考えさせられた。

2日目は第1ミニシンポジウム「学生の支えとなるキャリア教育の構築を目指して」に参加した。報告者は松高政京都産業大学教授、岩脇千裕労働政策研究・研修機構研究員、森邦昭福岡女子大学教授の3人であった。松高教授からは「大学におけるキャリア教育の意義と課題」と題して、①大学におけるキャリア教育の現状、②京都産業大学での取り組み紹介、③キャリア教育の意義と今後の報告された。キャリア教育の包括的な現状がよく理解できた。岩脇研究員からは「採用面接において評価される『能力』とは何か」と題して、企業インタビュー調査などで得られた知見が報告された。それによると大企業は必ずしも新卒に「即戦力」を求めているわけではなく、課題達成志向や自己コントロール能力、対他者コミュニケーション能力といった「より高度な基礎能力」が要請されているとのことであった。森教授からは「男女共同参画社会をめざすキャリア教育」という題で、現代GPにも採択された福岡女子大学のキャリア教育の事例報告があった。ジェンダー視点もいれて、「人間の生き方の問題」として捉えるキャリア教育観に納得させられた。質疑応答では「キャリア教育」が70年代アメリカで大学教育の改革運動として起こったという指摘もあり、「キャリア・ガダンス」の義務化も迫っている今、学生の生き方を視点にした大学教育全体の見直しが求められていると感じた。

学生のための教育を目指して

工学部 川井 秀樹

今回初めて大学コンソーシアム京都が主催する FD フォーラム (3月6日、7日) に参加した。本年度、海外から赴任し、アメリカの大学教育を受けてきた報告者にとって、大学教育の方法から日本の大学と社会の現状まで、多くのことを学ぶことができた充実したフォーラムとなった。

一日目は、「学生の学びを支える一つながり FD の展開」と題し、参加者全員でシンポジウムが行われた。岡山大学の橋本勝氏は「学生をつなぐ FD」、神保啓子氏 (名城大学) は「職員をつなぐ FD」、圓月勝博氏 (同志社大学) は「教員をつなぐ FD」、そして小田隆治氏 (山形大学) は「大学をつなぐ FD」と、4つの観点から発表が行われた。その後、コーディネーターである大塚雄作氏 (京都大学) を中心に質疑応答が行われた。

橋本氏は、教職学が参加して学生が委員長を勤める学生・教職員教育改善委員会を紹介。学生が科目内容を計画し講師を教員、及び職員から募集する学生発案授業の紹介があった。斬新なアイデアだと思った。また、“橋本メソッド”によるゲーム感覚で楽しむ授業方法が紹介された。知識授与型になりがちな理工系の専門的授業には現実性、適切性に欠けるかもしれないが、学生自身が潜在能力を発見できる授業方法だと思った。

神保氏は、名城大学では大学教育開発センターに FD 担当の常勤職員が 5 人おり、教育年報の発行、教員の授業見学会、教員のための Teaching & Learning Café など、多角的に取り組んでいると紹介。教員の FD に対する意識向上と教職員の連携の成果を発表した。

圓月氏は、教員の役割である研究、教育、社会貢献、管理運営に対し、異なったレベルで考える教員を如何につなぐかを論議した。大学教員のつなぎ方として教員の”生態系”における「2・6・2の法則」を紹介し、異論・問題などに対しては協議での解決を求めた。また、「つなぐ FD」の七つの心得を紹介し、新任である報告者には現実的な注意点で大変役立つ内容だった。教員をつなぐための新任教員研修の重要性も訴えていた。

小田氏は山形大学が始めた県内 6 大学・短大を連携する地域ネットワーク“樹氷”と、主に東北・北海道地域の大学を連携する“つばさ”の活動を紹介しながら、大学間のつながりによる教育向上、大学間の協調によるより良き社会づくり、アイボリータワーからの脱却などへの可能性を訴えた。

質疑応答では、大塚氏が学士力と FD の関係、FD の現状と効果などのテーマを提案。それに対し、名城大学の池田氏は FD のフォーカスは 1,2 年次の教育にあると述べ、FD による学びに対する学生の意識改革への効果を期待した。また、FD の効果を問うのではなく、各大学、学部が FD によって何を变えたいのかを明確にすべきだと述べた。目的を持たずに、ただ政府からの要求に対する義務で FD を行うのは恐ろしいことだと思った。小田氏は専門教育と学生のニーズに合わせた FD 教育の共存を訴えた。また、FD は全か無ではなく、大学・学部や教員各人の状況に合わせて常識的に行うべきだとも述べた。もっともであると感じた。“大学は実験の場である (成功率は 100%ではない)”との意見にも納得した。

このシンポジウムでは、各大学が“学生のため”の大学を創っていこうという意識づくりをしているように感じた。本学のめざすところと同じである。また、報告者の所属していたアメリカの大学(主に研究大学)のキャンパスでは FD に関する情報が全学ではなく、一部に限られていたため、参加した日本の多くの大学が、政府が関与して、欧米で行われているとされる FD 活動を教職学で大きく取り入れようとしている背景に、日本の文化、これまでの大学教育の文化、また日本社会の現状が絡み合っているのだと思った。

情報交換会では、殆ど FD 活動が進んでいない大学もあると伺った。

2 日目は、今後、学生と関わっていくのに必要な就職に関する知識を広めるため、「学生の支え

となるキャリア教育の構築を目指して」と題したミニシンポジウムに参加した。

松高政氏（京都産業大学）は、早期(初年度)からのキャリア教育の実践の効果を発表した。中でも、学生の勉強に対する意識の向上という効果には興味を持った。そして、産学連携により、学生が社会に繋がることができることを学んだ。また、新規学卒一括採用という日本の社会システムの変更と、3,4年次の就職活動を卒業後にするという取り組みは必要だと思った。

岩脇千裕氏（独立行政法人 労働政策研究・研修機構）は、日本の就職環境を研究に基づいて発表した。非常に興味深いデータが満載だった。特に、新卒者の学歴別構成比の過去 20 年間の変化には驚いた。2 割程度だった四大卒が、現在 6 割にも及ぶため、大卒の雇用種目の変化が余儀なくされていることに目を見張った。親御さんによる現状把握が必要だと思った。また、フリーターなどの増加が、学生の“質”ではなく、経済・社会状況によると報告があり、日本社会のもつ問題が浮き彫りになった。また、卒業生に企業が求めているものは、スペシャリストではなく、高度な教養力と課題達成力をもつ学生であると報告があった。理系卒業生には、技術面は成績をみれば分かるので、将来の管理職を考慮して、文系的評価、チームワークやリーダーシップが求められていると分かった。

森邦昭氏（福岡女子大）は、小規模な公立女子大での現代 GP の内容と成果を報告。1、2年次のキャリア教育科目により、学生が大きく成長したことを学生の作文を通して紹介した。また、日本社会のジェンダー問題に取り組み、学生と教職員の意識改革に勤めていることを紹介した。

質疑応答では、低偏差値の大学の卒業生が就職するには、学生の良い面を伸ばす方が効果的である、医薬系大学は殆どキャリア教育であり教養教育の必要である、各大学のキャリア教育の捉え方や必要性が異なる、学生による過剰なアルバイトの問題など、多岐にわたって話し合われた。日本の大学と社会を知るのに、非常に有意義であった。